

樺原民之助の生涯

原野を切り開き、多くの困難を乗り越え、中頓別の基礎を築き上げた偉大な開祖の生涯をご紹介します。



樺原民之助
中頓別町史より

民之助は1865年、大崎上島の東野村で次男として生まれた。民之助は船乗りを目指し、和船に乗り組み、船乗りとして腕を磨いた。

民之助が23歳のとき、乗船してい和船が遭難し、沈没。これを契機に民之助は帆船に乗り込んだが、またしても遭難し、命拾いをする。二度の遭難により民之助は船乗りを断念し、オホーツク沿岸で漁業を始めが明治30年に入るとニシン漁が不漁になつた。

そんなときに起きたのが、頓別川支流での砂金ブームである。不漁に苦しんだ漁師たちは砂金場を目指した。明治32年、民之助も砂金事務所の支配人として仕事をしていた。明治34年には砂金の産出量が落ち、事務所は閉鎖、民之助は新たな職を探すことになり、この頃から頓別原野の開拓を思い立つ。

明治35年、ペーチャン川支流から上流にある頓別原野の調査を始め。民之助は、身の丈を超す笹やぶ

に足元をとられ、生い茂る巨木で昼でも暗い原始林のなか、ヤブ蚊やブヨの襲撃に悩まされながら、頓別川の本流にたどり着いた。翌年夏、頓別原野4万5千坪の貸付を申請。期間は6年、この間に成功しなければ土地を返還しなければならない。

明治37年、民之助は道具一式を買ひ整え、頓別原野へ向かつた。休む間もなく仮小屋の建設を行い、周辺の樹木の伐採に取りかかつた。種をまく土地を確保するために小木を倒し、笹やぶを切り開いた。来る日も来る日もその連續だつた。

翌年には、切り開いたわずかな畑に、麦やソバ、カボチャ、豆、馬鈴薯などをまくことが出来た。驚いたことに収穫はどれも大豊作。これは頓別川が生み出した沃土の產物だつた。

明治40年、最初の隣人として桑原弥一がやってきた。ここから移住者が増え、小さな集落ができ、人口が増えるにつれ教育が問題になる。明

治42年、村人たちは草ぶき小屋の教育所を作つた。民之助はこのとき開拓した所有地の3アールを学校の敷地として寄附している。

このころ民之助は、移住してきた後藤竹蔵の妹セイと結婚し、翌年に長女の静江が誕生している。民之助にとって、やっと手にした家庭の幸運である。教育所設置の際、生まれてくる我が子のためによろこんで自分の土地を提供したのだろう。だが、静江がわずか生後1週間で死亡してしまう。44年には次女、小菊が生まれたが、今度は1週間後に妻のセイが死亡するという悲運に見舞われてしまう。妻を失い、生まれたばかりの赤ん坊と二人取り残された。

その中でも大正2年、教育所を木造校舎に新築する際も大金を寄付している。セイの忘れ形見、小菊の入学を心待ちにしていたのかもしれないが、その小菊も大正3年、わずか3歳でこの世を去つてしまつた。

この頃の民之助は多額の負債を抱えていた。民之助が土地の無償付与の成功検査を受けるため、人夫を雇い、小作人に土地の一部を分け与えて開墾を急いだためである。この結果、民之助は返済のために多くの土地を手放し、最後は3アールの畠だけが残つた。そんな民之助に同情した部落民たちが5ヘクタールの払い下げを求めようとしたが、たつた一人で原野を伐り開いた男の誇りが許さなかつたのだろうか。民之助はこうした動きを拒否するかのように大正7年3月、住み慣れた頓別原野を後にして故郷の東野村に戻つた。

生家では両親や兄はすでに亡くなつていたが、義姉のカメの世話になり、昭和7年、68歳で亡くなるまで自適に生涯を過ごした。幼い頃、晩年の民之助と一緒に暮らしていた甥の正明は「伯父は大変もの静かな人でした。釣りが好きで、釣竿をさげてよく海にでかけていく姿が記憶に残っています」と話している。